〔1433〕

氏名（生年月日）	朱（シュ）　力（リキ）　（1993 年 6 月 16 日）
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	文博甲第 158 号
学位授与の日付	2023 年 3 月 16 日
学位授与の要件	中央大学学位規則第 4 条第 1 項
学 位 論 文 題 目	**中国当代の反ユートピア文学**
論 文 審 査 委 員	主査　飯塚　容
	副査　材木谷　敦・関根　謙

内容の要旨及び審査の結果の要旨

（1）テーマ設定に関して

本論文は、20 世紀初頭からの歴史や社会状況を背景に複雑な変化を遂げてきた中国のユートピアに関連する文学について、特に 1990 年代以降に出現した反ユートピア文学を中心に考察したものである。この時期の反ユートピア文学の創作手法やテクストに見られる特徴を分析することによって、中国現代社会における「ユートピア」をめぐる言説の実体を明らかにしようとする問題意識には、重要な意義が認められる。中国の現代文学史（中華民国期）および当代文学史（中華人民共和国成立以降）を「ユートピア」をキーワードにして鳥瞰しようというテーマ設定は、従来の研究には見られなかった意欲的な試みとして、高く評価できるだろう。また、本論文が焦点を当てている 1990 年代から 2010 年ごろまでの SF 文学を含む領域は未開拓の分野で、先駆的な成果となることが期待できる。

（2）研究方法の適切性に関して

具体的な作品のテクスト分析を基本としているのは妥当な選択と言える。客観的かつ総合的な考察を可能とするために、相当な数の「ユートピア」に関連する文学作品を深く読み込んでいる。日本語および中国語の先行研究を幅広く踏まえていることは言うまでもない。また、テクスト構造の分析に当たっては、フォルマリズムや構造主義の文学理論を適宜参照している。全体として、資料の取り扱いや論証の手順は手堅く、研究上の倫理に対する配慮においても瑕疵はない。

（3）論文構成と論理性に関して

本論文は以下の構成で、全六章からなる。

はじめに

第一章　ユートピアをめぐる諸概念について
　第一節　「ユートピア」について
　第二節　「ユートピア」と「反ユートピア」およびその発展
　第三節　中国のコンテクストにおける「ユートピア」
　小結
第二章　中国現当代におけるユートピアに関連する文学創作の系譜
　第一節　民国期（1911 年～1949 年）：ユートピア文学からディストピア文学への移行
　第二節　新中国建国初期（1949 年～1950 年代前半）：ユートピア文学の再現
　第三節　1960 年代前半および文化大革命期（1960 年代前半～1976 年）：ユートピア文学とリアリズムの融合
　第四節　文化大革命終結から改革開放初期（1976 年～1986 年）：SF 文学の再現と反ユートピア三部作の翻訳
　第五節　1980 年代以降：SF 文学に見られる反ユートピア的要素
　第六節　1990 年代以降：反ユートピア文学の登場と発展
　第七節　2010 年代以降：反ユートピア文学の変貌
　第八節　香港、台湾におけるディストピア、反ユートピア作品
　小結
第三章　反ユートピア文学におけるテクスト構造
　第一節　先行研究および四つのユニット
　第二節　中国当代の反ユートピア作品における四つのユニット
　第三節　ユニットの機能とテクストの特色
　小結
第四章　反ユートピア文学における暴力
　第一節　暴力と諧謔
　第二節　暴力と象徴
　第三節　暴力と忘却
　第四節　暴力と観念
　第五節　暴力の源流および特徴
　小結
第五章　反ユートピア文学における人物形象
　第一節　閣楼に住む夢想家
　第二節　抑圧される芸術家
　第三節　時代に合わない周辺人
　第四節　苦悩する現代人
　第五節　人物形象の特殊性

小結
第六章　反ユートピア文学の変貌
第一節　「江南三部作」におけるユートピアと反ユートピア
第二節　曖昧で不明確なユートピア
第三節　ユートピアの表象の錯綜
第四節　テーマにおける齟齬
第五節　「ユートピアの精神」という評論について
小結
おわりに

第一章では「ユートピア」に関する諸概念、とりわけ本論文で頻繁に使用される「現代的ユートピア」「ディストピア」「反ユートピア」「正反ユートピア」について、文学の視座から検討している。また、清末の中国における「現代的ユートピア」の形成過程を振り返り、西洋とは異なる中国のユートピア文学の特徴を整理した。第二章では、時代順に中国現代当代におけるユートピアに関する文学創作の系譜をたどっている。中華民国期はユートピア文学からディストピア文学への移行の時代、新中国建国初期はユートピア文学再現の時代、1960 年代前半および文化大革命期はユートピア文学とリアリズムの融合の時代、改革開放初期は SF 文学再現の時代と整理できる。反ユートピア文学が登場する 1990 年代以降は、本論文の中心部分となるので、主要な作家ごとに作品発表の状況をまとめている。また、2010 年以降に見られる新たな変化、香港と台湾におけるディストピア、反ユートピア作品についての言及もある。以上、第一章と第二章の内容は、第三章以降の分析の前提として欠かせない部分と言えるだろう。

第三章から第五章までは、1990 年代以降の反ユートピア作品の具体的分析となる。第三章は、五人の作家（王小波、閻連科、陳冠中、韓松、格非）の作品を取り上げ、これらに共通するテクスト構造とその特色を明らかにした。第四章では、四人の作家（王小波、閻連科、陳冠中、韓松）の作品に描かれている暴力のシーンを比較検討し、社会背景の変化に伴って暴力の表現にどのような違いがあるかを考察している。第五章は、四人の作家（格非、王小波、陳冠中、韓松）の作品に登場する「狂人」の描かれ方を比較分析し、反ユートピア文学における人物形象の特殊性を指摘した。

第六章は、格非の「江南三部作」を手掛かりに、反ユートピア文学から正反ユートピア文学へと変貌しつつある中国文学の現状に触れた。こうした構成を見ると、本論文が多角的なアプローチによって考察を積み重ね、最終的に「1990 年代以降の中国がどのようにユートピアを受け入れようとしているか」という中心テーマに迫っていることがわかる。

（4）論文の形式に関して

筆者は中国人留学生として日本に来て以来、努力を重ねて日本の学術論文の作成方法を身につけた。よって、本論文においても、専門用語の使い方や文章の書き方などに破綻はない。特に、文学

作品や先行研究の引用の部分では、既訳のあるものはそれを使い、ないものは自ら正確な日本語に訳出すると同時に注釈で原文を示している。また、ユートピアの諸概念を整理した表 1（第一章第二節）、中国当代の主要な反ユートピア小説のテクスト構造を著者が提起した四つのユニット（「提示」「実行」「変質」「閉鎖」）に当てはめた表 2（第三章第二節）は、論旨を明確にする上で効果的だった。

（5）独自性と意義に関して

中国の反ユートピア文学に関する先行研究は、個別の作家や作品について論じたものがほとんどである。そうした中で、広範囲にわたって中国の現当代文学史上のユートピアに関する作品に目配りしているという点で、本論文には独自性がある。作品分析においては、反ユートピア文学の概念に基づいて検討対象を選定し、多角的な考察を加えることで、異なる作家の一見隔たりが大きい作品の間に共通する特徴を発見することができた。また、1990 年代以降の反ユートピア文学の研究は、政治と密接な関係があり、中国本土の研究者がなかなか踏み込めない領域も存在すると思われる。その点で本論文は有利な研究環境を生かし、核心に迫る考察が可能になった。

（6）不正行為に関して

本論文に剽窃等の不正行為がないことは確認している。引用された資料の取り扱いにも、不都合な点は見い出せなかった。

克服すべき課題としては、論文の前段に当たる第一章（ユートピア文学の概念の記述）および第二章（中国現代当代文学史に関わる記述）の部分がバランス的にやや重すぎること、一部の小説に対する分析が反ユートピアの視点に引きつけすぎたために原作者の意図から遊離するきらいがあること、検討対象作品の確定において恣意性が見られること、近年の新しい文学理論や思想哲学の吸収と応用という点で不足があること、などが指摘できる。

しかし総じて言えば、本論文は上記のような若干の課題を残しながらも、中国におけるユートピア文学の変遷を踏まえ、1990 年代以降の反ユートピア文学の特色と社会の関わりを考察したものとして価値が高い。先行研究の手薄な領域に斬り込んだ論考で、独自性がある。よって、本論文は博士（文学）の学位を与えるに相応しいと判断する。